

ふるさと火の国

映画祭の灯 街に人々に広がる熱気

4日に開幕した菊池映画祭。主会場となる菊池市は、すでに映画館が姿を消した街だ。地域の大人たちはその地で、映画祭の「灯」をともし続けている。菊池、山鹿、玉名……。街を歩くと、その明かりが、だんだん地域に広がっているのを感じた。(奥正光)

■ 実行委員長は菓子店主

映画祭の実行委員会メンバーたちは、普段は地域の電器屋、ガス屋、教師など職業は様々。委員長の中原源士郎さん(52)は、菊池の伝統菓子店「あまもとや本店」の店主。「(昨年)5月から準備をしてきて、ずっと映画祭をしているようにです」と笑う。

特に映画に詳しいわけではないが、ただ子どもの頃、亡くなった父を映画館に迎えに行ったことをよくおぼえている。「お客さんが来ているよ」。そう伝えようと、スクリーンに熱中

する人たちが待つ暗がりへ入っていった思い出だ。当初は韓国映画祭として出発したというこの映画祭に、2008年ごろから関わってきた。「もっと見せたい映画を流そう」。そんな思いから、リクエストボックスを地域の物産館などに置いた。

映画祭のディレクターを務める映画監督の行定勲さんが熊本出身であることは知っていた。日本アカデミー賞最優秀監督賞を受賞した「GO」(01年)が好きで映画祭でも上映。地元口

準備に1年 人が育つ場

ケを実現しようと、資金集めに奔走したこともあり、関係を深めてきた。

「映画祭はお客さんが中心で、ゲストがその次だ」

の価値を高めた。行定さんの思いがひしひしと伝わってきた。映画祭の会場設備に行くも自分を含め2人しか来ていないこともあったが、前回の14年は延べ7千人が訪れるまでに

木原健一朗さん(33)は前年から運営に関わる。「話し合いに行ったら最後でした……。イベントは、やりたいこと、思いがあるからできるんだな」

実行委のメンバーは20人ほどだが、中原さんは「イベントは人が育つ場。その人のポテンシャルを引き出すことに本当の意味がある」。それが街が変わることにもなると思う。

開幕直前になって参加が決まった高良健吾さんが前



菊池映画祭実行委員会の中原源士郎さん(左)と木原健一朗さん＝菊池市限府



土曜 ゲン・ブン・ロク

看板絵師冥利 5枚一気

ゲストの中井貴一さんや、その父である故・佐田啓一さん。映画祭の会場周辺には、かつて街の映画館がにぎわった時代の熱気が伝わってきた。看板が飾られている。玉名市築地の看板絵師・松尾寿夫さん(78)が、今年の映画祭のために、ペンキで描き上げた作品だ。

昨年末、作業場を訪れた行定さんから依頼を受け、「血が騒いだ」1カ月ほどで、今回上映される「その木戸を通って」(1993年)、「東京上空いらいっしゅいませ」(90年)、「この広い空のどこかに」(54年)などの5枚を仕上げた。

「燃えるような気持ちで、時には『俺は待ってるぜ』なんて口ずさみながら、映画にのめり込んで

描くんだ」。そう言って笑う。

中学時代の恩師が絵の才能を見抜き、こう薦めた。「特異な才能に生きよ」。それで道を決めた。卒業後は玉名市にあった映画館「大洋館」に入って修行。師匠が帰宅した後の夜、スターたちのデッサンを何度も描いて色をつけ、腕を磨いた。

その後、東京で映画看板絵師として働いた後、1965年に帰郷。映画ブームは去り、一時は離れたが、2001年の同市天水町での映画祭をきっかけに制作を再開した。

今回は、近くの菊池市で始めた映画祭からもらった機会。「看板絵師冥利に尽きる。映画の看板は青春のすべてだった。青春を呼び起こしてもらったんだから、その思いに応えないと」。絵師は力を込めて語った。

裏方手伝い 巨大旗作り



菊池映画祭のために巨大な旗を手作りした生徒たち＝菊池市限府の菊池高校

回に続いて駆けつけてくれ。この「熊本」だから。もう、映画祭は菊池だけのものではないと思う。「それはこのではない」

■ 菊池高生に熱意と共感

映画祭の息吹が、地元の菊池高校の生徒たちにも届いている。

「これが映画か……」。1年生の池辺祐太君(16)ら「映画グループ」のメンバーは昨年10月、行定さんが監督した「うつくしいひと」の撮影地、菊池深谷にいた。機材を運び、弁当を関係者に配るの手伝いながら現場を垣間見た。「何回も撮り直し、ピリピリした雰囲気伝わってきた」

池辺君は、小学生時代から映画を作りたいと思い、家庭用ビデオカメラで撮影を始めた。中学に入ると、将来は映画監督になると決めた。10代になったばかりのころ出会った作品「時計じかけのオレンジ」(スタンリー・キューブリック監督)で、映画の芸術性に魅

「みんなで盛り上げたい」との思いを込めた。「映画館がない街だけど、やりたいたいと思った地域の人が映画を成功させている。自分の街を見直すきっかけになる」。今回もボランティアの一人として、参加する予定だ。

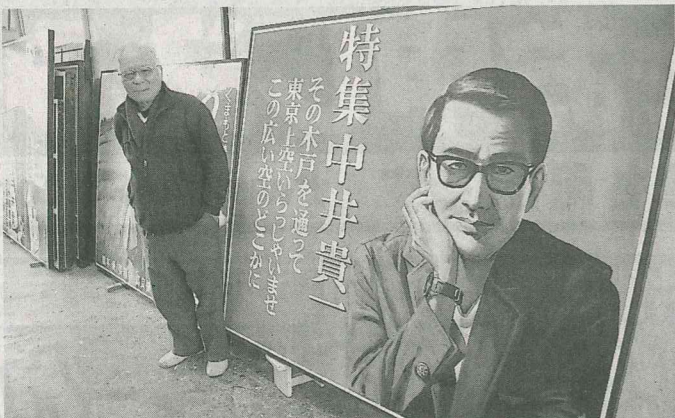
映画祭実行委のメンバーでもある同高の吉田真一(16)君には、こんな思いがある。「生徒たちには、街を元気にしたいというだけで、地に足のついた活動をしている街のおっちゃんたちを知ってほしいんです」



菊池高校前で、制作中の映画の画像について話す池辺祐太君(右)ら＝菊池市限府

「うつくしいひと」(まもとや本店)は今年、公開予定。KAB熊本朝日放送では撮影現場を追ったドキュメンタリー「映画監督・行定勲」故郷を想う」を21日午後7時から放映予定。

松尾寿夫さんが今年の映画祭用に描いた作品「玉名市築地」



行定監督の依頼 78歳「血騒いだ」